

令和5・6年度

アーツカウンシルさいたま研究アソシエイト事業  
「まちのアート系スペースの成立とその展開に関する研究  
～さいたま市における事例を通して～」

研究アソシエイト 温盛義隆

第1章	研究の背景と目的	p. 2
1.1	研究背景	p. 2
1.2	研究目的	p. 2
1.3	既往研究	p. 3
第2章	研究方法及びその対象	p. 4
第3章	分類と考察	p. 6
3.1	スペースの設立年と分布	p. 6
3.2	活動・事業内容	p. 8
3.3	立地環境及び建物形態	p. 9
3.4	スペースの変容有無（当初の想いとその後の展開）	p. 10
第4章	調査研究事例	p. 11
4.1	調査研究事例. 01- Space845	p. 11
4.1.1	Space845 その成り立ち、建物の転用プロセス	p. 12
4.1.2	Space845 の展開と文化芸術活動ネットワーク	p. 13
4.2	調査研究事例. 02- Cha Tora & Co Tora	p. 15
4.2.1	Cha Tora & Co Tora その成り立ち、建物の転用プロセス	p. 16
4.2.2	Cha Tora の展開と文化芸術活動ネットワーク	p. 18
第5章	まとめ、そして展望	p. 20
第6章	あとがき（Living Room ~ 実践編）	p. 22

## 第1章 研究の背景と目的

### 1.1 研究背景（さいたまアートの新しいフェーズ）

近年、文化芸術を取り巻く状況は変化し続け、地域課題や福祉、医療、教育といった地域や生活の文脈のなかに文化芸術が位置付けられ、その社会的役割がますます注目されるようになってきている。

さいたま市においても、さいたま市文化芸術都市創造条例施行（2012）、そして3度の国際芸術祭事業（2016、2020、2023）及びその準備活動などから端を発した活動やコミュニティ、ネットワークによる文化芸術事業等も徐々に目立つようになってきている。「さいたまトリエンナーレ 2016」ステートメントに “開催後の継続的な活動の萌芽を生み出します” とあるように当時、街中に蒔かれた「文化芸術都市さいたま市」の創造へ向かう萌芽が立派に育まれていると言えるだろう。そしてその新しい文化芸術事業や活動、ネットワーク、仕組みを支えていくと期待されるアーツカウンシルの設立（2022）を経て、いままさに「文化芸術都市さいたま市」の創造へ向かうさらなる発展への次なるフェーズを迎えようとしている。

3度目の芸術祭も終え、ふかふかに耕された“さいたまアート”の大地、そしてその新しい日常から、地域・市民生活に根差したより多くの活動やアートプロジェクト、アートチームなどを展開するプレーヤー、そしてそれらの多様で大小様々な表現を育むための市民に身近な新しい文化活動拠点「まちのアート系スペース」が次々にできてくることが予想される。そしてここに、さいたま市における「まちのアート系スペース」の現状について研究をすることの意義を見出すことができる。

### 1.2 研究目的（スペース設立～実践する際の参考となる研究）

本研究は、さいたま市内で現在進行形の「まちのアート系スペース」の事例を調査・研究（具体的には、スペースの現状と課題、持続へ向けたキーファクター等の抽出・検証等）をすることで、今後新たな”まちのアート系スペース”創出に必要な仕組み、プレーヤー、運営方法等を探ることを目的としており、今後さいたま市で「まちのアート系スペース」を実践する（実際にアート系スペースを始める人向けのスターターキットを作る！）際の参考となる基礎研究としての有効性も期待している。

また、さいたま市における「まちのアート系スペース」事例も他の多くの地域・事例同様に、空き家利活用の事例が多く、昨今さいたま市でも顕在化している地域課題、空き店舗・空き家問題 地域のさらなる高齢化、事業後継者不足等により今後さらに深刻化してくる可能性、その解決方法のひとつとしての先行事例でもあるとも考えられる。空き店舗、空き家活用のひとつの方法としての「まちのアート系スペース」の意義と役割も期待したい。

### 1.3 既往研究

アートスペースや文化的活動拠点に関する研究は数多くある。アートによるまちづくり、遊休不動産利活用の可能性、拠点運営の実態把握や支援制度の研究は行われているが、それぞれの拠点の成立とその展開について主宰者の視点や想いについて具体的に言及し考察したものは多くない。本研究では、地域における文化的活動拠点の実態、役割について調査を行うことから、地域における拠点運営の発展、今後の文化的活動の評価システムの一助となることを期待する。

#### まちのアート系スペース = オルタナティブなアートスペース？

まちとアートスペースに関する関係をみていく際には、“オルタナティブ・スペース”に関するいくつかの言及が参考になる。そこでは、“まちのアート系スペース = オルタナティブ・スペース と定義可能であり、オルタナティブ・スペースに関する言及はそのまま”まちのアート系スペース”にも適用可能であり、これからのさいたま発の”さいたまアート”をインキュベートし（育て）ていく場所になると期待される。

美術館やギャラリーといった”ホワイト・キューブ”<sup>1</sup>を脱し、新しい表現を育む機能を果たしているといえる”オルタナティブ・スペース”は、運営主体や空間規模が多様であり、既存の倉庫やビル、家屋、学校などを改修し、利活用しているケースが多くみられる。また、“オルタナティブ・スペース”は潜在的に固有の場所と歴史等との密接な関係、地域・市民・社会とのつながりが高く、ジャンルを超えた表現活動にも自由で柔軟な対応が可能、地域・市民生活に寝ざした実験的で先鋭的なアートのためのインキュベーション機能を担っていくとされる。（井上、2014）

---

<sup>1</sup> 美術館やギャラリーの展示空間で、白い壁で統一された空間。鑑賞者の注意を作品だけに集中させる目的において、展示空間からいっさいの装飾的要素を排除したニュートラルな空間。

スペースを利用するアーティスト側からすれば、既存の社会・地域・歴史などとのダイレクトな接続、影響をうけることもあるだろうし「オルタナティブ・スペース」が“アーティスト”と“地域・市民”との双方に働きかける作用、そして逆に「オルタナティブ・スペース」が“アーティスト”と“地域・市民”との双方からの働きかけを受けて変態変容していく可能性もあるかもしれない。

## 第2章 研究方法及びその対象

方法 <small>研究方法及びその対象</small>	対象 <small>いくつかのモデル・ケース</small>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>現地調査</b></li> </ul> <p>まちや拠点周辺の調査・観察、フィールドワーク（参与観察）、実践</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>市民の身近な文化活動拠点</b></li> </ul> <p>『さいたま国際芸術祭 市民サポーター事業 “さいたま市内アート系資源調査”』に選定・登録されている拠点</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>文献調査</b></li> </ul> <p>『さいたま国際芸術祭 市民サポーター事業“さいたま市内アート系”資源調査』など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>2012年以降のOPEN</b></li> </ul> <p>2012年以降、まちのアート系スペース”の設立～その展開が特に顕著！“さいたま市内アート系資源調査掲載の全38件内28件（約75%）が2012年以降開業、その内の半数14件が既存建物・スペース利活用事例であり、特に2012～2016年間の設立5件、その後2020年以降その傾向が極めて顕著であることが興味深い。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>分類・考察</b></li> </ul> <p>それぞれのアート系スペースの成り立ちや建物の転用プロセス + スペース主宰者の視点・想い～その後の展開、ネットワークに着目</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>既存の建物を利用した事例</b></li> </ul> <p>2012年以降開業、その内の半数14件が既存建物・スペース利活用事例であり、特に2012～2016年間の設立5件、その後2020年以降その傾向が極めて顕著であることが興味深い。</p>

さいたま市における現在進行形の「アート系スペース」事例としていくつかのモデルケースを研究対象とし、そこで行われている現在進行形の活動またそれに至る経緯、関連アーティスト、地域・市民生活との関わり等の調査（文献調査、現地調査・フィールドワーク及び、スペース主宰者や関連アーティスト、関係者などの各人へのインタビュー等）を行う。

それぞれのアート系スペースの成り立ちや建物の転用プロセス（スペース主宰者の視点・想い）～その後の展開、ネットワークに着目し、地域における文化芸術活動の拠点がどのように誕生しどう展開していくか～持続へ向けたキーファクターの抽出・検証をする。

研究対象とするモデルケースについては、“まちのアート系スペース”の設立～その展開が特に顕著にみられる 2012年以降設立のケースを中心に、市民の身近な文化活動拠点となっている“アート系スペース”のうち”オルタナティブ・スペース”の定義にも準ずる既存の建物を利用した事例を主な対象とする。

さいたま市における現在進行系のアート系スペース事例の選定にあたり、『さいたま国際芸術祭 市民サポーター事業 “さいたま市内アート系資源調査”』を活用、調査において、アート系資源として選定・登録されているもの、且つ、2012年以降に設立したもの、かつ既存建物を利活用しているものとする（表1・黄色）。

実施：全38件内28件（約75%）が2012年以降開業、その内の半数14件が既存建物・スペース利活用事例であり、特に2012—2016年間での設立5件、その後2020年以降その傾向が極めて顕著であることが興味深い。

拠点名	オープン	分布	転用前用途	主用途	立地	アート系事業・活動			
						制作	展示	レジデンス	イベント
1 TOROto キッチン&コワーキングスペース	2024	北区		シェアスペース			○		○
さいたま国際芸術祭2023									
2 GAFU -gallery & space-	2023	南区	工場	シェアスペース	住宅街		○		○
3 ハムハウス—夢中飛行	2022	大宮区	図書館	書店（棚貸）	商店街		○		○
4 カフェ&ギャラリー 空想庭園	2021	北区		カフェ&ギャラリー	住宅街	○	○		○
5 Cha Tora & Co Tora	2021	岩槻区	化粧品店	シェアキッチン、スタジオ	商店街	○	△		○
6 Nook & Park	2021	岩槻区	社員寮	カフェ&シェアスペース	裏路地	○	△		○
さいたま国際芸術祭2020									
7 CHICACU BookStore（移転）→本と	2020	浦和区							
8 コンドウハウスKonキッチン	2020	緑区	民家	カフェ、こども食堂	住宅街		○		○
9 Space 845	2020	岩槻区	事務所	AIR	住宅街—農地	○	○	○	○
10 STUDIO・4 5	2020	浦和区	写真スタジオ	写真スタジオ、イベント	住宅街		○		○
11 takase	2020	緑区							
12 マーブルテラス	2020	浦和区			住宅街		○		○
13 STAND Coffee コトコト&Gallery	2019	南区	2世帯住宅	カフェ&ギャラリー		△	○		○
14 つきのみちくさ	2018	浦和区		レンタルスペース	住宅街		○		○
15 カフェブルーバード	2018	大宮区		カフェ&ギャラリー	住宅街		○		○
16 クラフト&ギャラリー風画	2018以前	西区					○		
17 靴下と生活雑貨のお店さきつちよ	2017	浦和区			住宅街		○		
18 ONVO SALON urawa	2017	浦和区			商業エリア		○		○
19 ブロックはかせ LABO	2017	浦和区							○
さいたまトリエンナーレ2016									
20 しばふハウス（拠点移転）	2016	中央区							○
21 ファーム・インさき山	1997/2016	緑区	農地	農地、イベントスペース	農地	○	○		○
22 ギャラリー&カフェエンラII	2016	見沼区					○		○
23 ギャラリー榎桶（kusu kusu）	2015	大宮区	古民家	ギャラリー、ショップ	商業エリア		○		○
24 Gallery Pepin	2015	緑区			住宅街		○		○
25 路地裏GarageMarket	2014	中央区	工場	シェアスペース、マルシェ	住宅街	○	○	△	○
26 カフェMaru	2013	大宮区	古民家	カフェ&ギャラリー	住宅街		○		○
27 師岡制作所	2012	見沼区	印刷工場	シェアアトリエ	住宅街	◎	○		○
28 モッキンカン木の森美術館	2012	南区					◎		○
さいたま市文化芸術都市条例									
29 ヘルシーカフェのら	2009	南区							○
30 ギャラリー南風蔵の家（店舗移転）	2009	中央区					○		
31 ギャラリーカフェラルゴ	2009	中央区					○		
32 ギャラリー健	2008	南区					◎		
33 木力館	2006	岩槻区					◎		
34 カフェレストランBAOBAB	2002/2020	桜区							
35 社会福祉法人みぬま福祉会工房集	2002	川口市							
36 ギャラリー彩光舎		浦和区					○		
37 柳沢画廊		浦和区					◎		
38 Cafe&Gallery温々	1993	見沼区					◎		
39 あっふるはうす	1979	大宮区					○		

（表1）『さいたま国際芸術祭 市民サポーター事業 “さいたま市内アート系資源調査”』より、2012年以降の設立、かつ既存建物を利活用した物件を選定、研究対象とする。

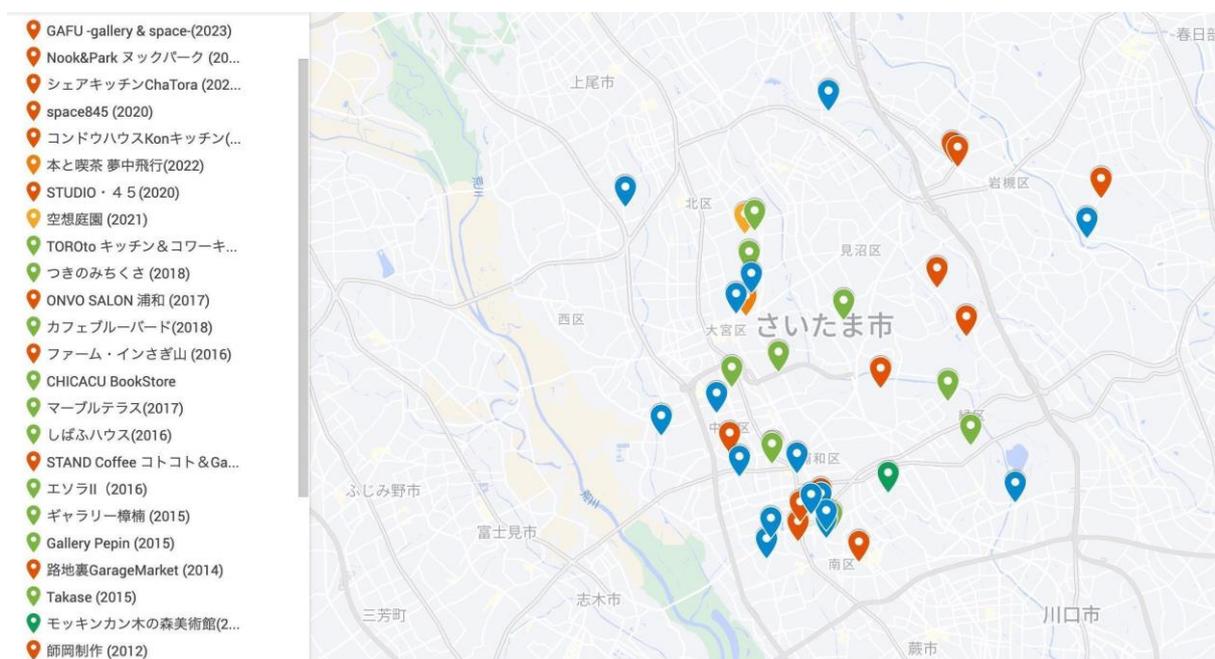
### 第3章 分類と考察

#### 3.1 スペースの設立年と分布

スペースの設立年に関して、2012年さいたま市文化芸術都市創造条例施行以降の設立が集中し、さいたまトリエンナーレ2016、さいたま国際芸術祭2020、2023と芸術祭を経るごとに設立件数が増えていくことが下表からも読み取れる。特に、2020年以降設立したそのほとんどのスペースは建物転用・利活用を経てアート系スペース化していることも興味深い。

拠点名	オープン	分布	転用前用途	主用途	立地	アート系事業・活動			
						制作	展示	レジデンス	イベント
1 TORoto キッチン&コワーキングスペース	2024	北区		シェアスペース			○		○
さいたま国際芸術祭2023									
2 GAFU -gallery & space-	2023	南区	工場	シェアスペース	住宅街		○		○
3 ハムハウスー夢中飛行	2022	大宮区	図書館	書店(棚貸)	商店街		○		○
4 カフェ&ギャラリー 空想庭園	2021	北区		カフェ&ギャラリー	住宅街	○	○		○
5 Cha Tora & Co Tora	2021	岩槻区	化粧品店	シェアキッチン、スタジオ	商店街	○	△		○
6 Nook & Park	2021	岩槻区	社員寮	カフェ&シェアスペース	裏路地	○	△		○
さいたま国際芸術祭2020									
7 CHICACU BookStore (移転) 一本ど	2020	浦和区							
8 コンドウハウスKonキッチン	2020	緑区	民家	カフェ、こども食堂	住宅街		○		○
9 Space 845	2020	岩槻区	事務所	AIR	住宅街ー農地	○	○	○	○
10 STUDIO・4 5	2020	浦和区	写真スタジオ	写真スタジオ、イベント	住宅街		○		○
11 takase	2020	緑区							
12 マーブルテラス	2020	浦和区			住宅街		○		○
13 STAND Coffee コトコト& Gallery	2019	南区	2世帯住宅	カフェ&ギャラリー		△	○		○
14 つきのみちくさ	2018	浦和区		レンタルスペース	住宅街		○		○
15 カフェブルーバード	2018	大宮区		カフェ&ギャラリー	住宅街		○		○
16 クラフト&ギャラリー風画	2018以前	西区					○		
17 靴下と生活雑貨のお店さきつちよ	2017	浦和区			住宅街		○		
18 ONVO SALON urawa	2017	浦和区			商業エリア		○		○
19 ブロックはかせ LABO	2017	浦和区							○
さいたまトリエンナーレ2016									
20 しばふハウス(拠点移転)	2016	中央区							○
21 ファーム・インさぎ山	1997/2016	緑区	農地	農地、イベントスペース	農地	○	○		○
22 ギャラリー&カフェエツラII	2016	見沼区					○		○
23 ギャラリー樟桶(kusu kusu)	2015	大宮区	古民家	ギャラリー、ショップ	商業エリア		○		○
24 Gallery Pepin	2015	緑区			住宅街		○		○
25 路地裏GarageMarket	2014	中央区	工場	シェアスペース、マルシェ	住宅街	○	○	△	○
26 カフェMaru	2013	大宮区	古民家	カフェ&ギャラリー	住宅街		○		○
27 師岡制作所	2012	見沼区	印刷工場	シェアアトリエ	住宅街	◎	○		○
28 モッキンカン木の森美術館	2012	南区					◎		○
さいたま市文化芸術都市条例									
29 ヘルシーカフェのら	2009	南区							○
30 ギャラリー南風蔵の家(店舗移転)	2009	中央区					○		
31 ギャラリーカフェラルゴ	2009	中央区					○		
32 ギャラリー健	2008	南区					◎		
33 木力館	2006	岩槻区					◎		
34 カフェレストランBAOBAB	2002/2020	桜区							
35 社会福祉法人みぬま福祉会工房集	2002	川口市							
36 ギャラリー彩光舎		浦和区					○		
37 柳沢画廊		浦和区					◎		
38 Cafe&Gallery温々	1993	見沼区					◎		
39 あっぶるはうす	1979	大宮区					○		

また、研究対象となる市内のアート系スペースの分布については、空き家数や建物質料等条件とも関連があると推測されるが、特に岩槻区（3件）、浦和区（2件）、南区（2件）、緑区（2件）に事例が多く、その中で都市部/ 周辺部とある程度分布の分類が可能である。岩槻区に2020年以降3件の設立があることは、2020年から始まったリノベーションスクール@岩槻の影響の他に、さいたまトリエンナーレ2016のメイン会場が岩槻エリアであったこと等との関連も見出せるかもしれない。（地図中・赤マークが2012年以降開業の既存建物を利用したスペース事例）



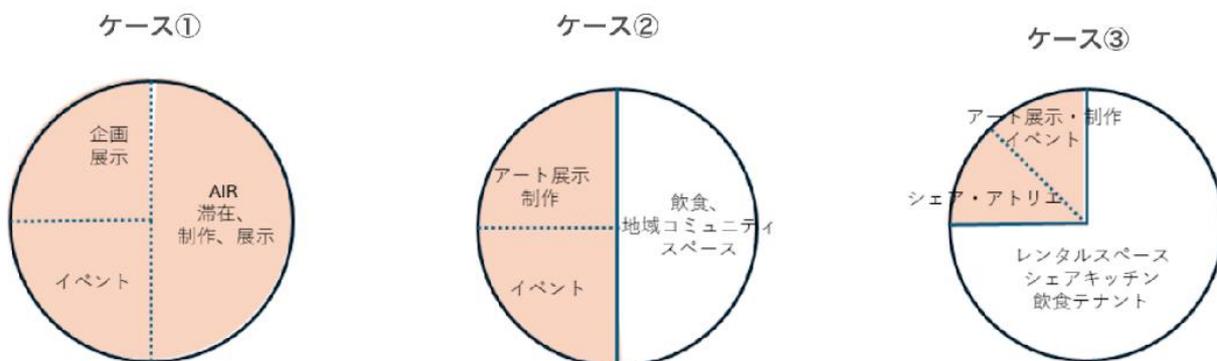
### 区ごとの調査施設数（令和5年度末時点）

西区	1施設	桜区	1施設
北区	2施設	浦和区	9施設
大宮区	4施設	南区	5施設
見沼区	3施設	緑区	4施設
中央区	4施設	岩槻区	3施設
市外	1施設	合計	37施設

### 3.2 活動・事業内容

拠点名	オープン	主用途	事業・活動内容												
			アート系事業・活動				文化・商業系活動					生活・コミュニティ系			
			制作	展示	レジデンス	イベント	レンタルスペース	オフィス	学習・講座	飲食	物販	図書	地域支援	居住	
1 TOROto キッチン&コワーキングスペース さいたま国際芸術祭2023	2024	シェアスペース		○		○			○		○	◎			○
2 GAFU -gallery & space-	2023	シェアスペース		○		○		◎				○			
3 ハムハウス-夢中飛行	2022	書店(租賃)		○		○		○				○	○	◎	
4 カフェ&ギャラリー 空想庭園	2021	カフェ&ギャラリー	○	○		○						◎	○		○
5 Cha Tora & Co Tora	2021	シェアキッチン スタジオ	○	△		○		◎				◎	○		
6 Nook & Park	2021	カフェ&シェアスペース	○	△		○		◎			○	◎			○
さいたま国際芸術祭2020															
7 CHICACU BookStore (移転) 一本ど	2020														
8 コンドウハウスKonキッチン	2020	カフェ、子ども食堂		○		○		○				◎			○
9 Space 845	2020	AIR	○	○	○	○									
10 STUDIO・4 5	2020	写真スタジオ、イベント		○		○		○							
11 takase	2020											◎			
12 マーブルテラス	2020			○		○						◎	◎		○
13 STAND Coffee コトコト&Gallery	2019	カフェ&ギャラリー	△	○		○		○			○	◎	○	○	◎
14 つきのみくち	2018			○		○		○			○	◎	○		○
15 カフェブルーバード	2018			○		○		○			○	◎			
16 クラフト&ギャラリー風面	2018以前			○		○		○			○	◎			
17 靴下と生活雑貨のお店さきつちよ	2017			○		○		○			○	◎			
18 ONVO SALON urawa	2017			○		○		◎	◎		○	◎			
19 ブロックはかせ LABO	2017			○		○		○			◎	◎			○
さいたまトリエンナーレ2016															
20 しばふハウス(拠点移転)	2016					○					○	◎			○
21 ファーム・インさぎ山	1997/2016	農地、イベントスペース	○	○		○		○			○	◎			
22 ギャラリー&カフェエソラII	2016			○		○					○	◎	○		○
23 ギャラリー榎橋(kusu kusu)	2015	ギャラリー、ショップ		○		○						◎	○		
24 Gallery Pepin	2015			○		○			○	○		◎			○
25 露地裏GarageMarket	2014	シェアスペース、マルシェ	○	○	△	○		◎			○	◎	◎		
26 餅屋制作所	2012	シェアアトリエ	◎	◎		○		○		△	△	◎	△		
27 モッキンカン木の森美術館	2012			◎		○						◎			○
さいたま市文化芸術都市条例															
28 ヘルシーカフェのら	2009					○					○	◎	◎		○
29 ギャラリー南風蔵の家(店舗移転)	2009					○						◎			
30 ギャラリーカフェルゴ	2009					○						◎			
31 ギャラリー一雙	2008					◎						◎			
32 木カ館	2006					◎						◎			
33 カフェレストランAODBAB	2002/2020											◎			
34 社会福祉法人みぬま福祉会工房集	2002											◎			
35 ギャラリー彩光舎					○			○			◎	◎			
36 柳沢画廊					◎							◎			
37 Cafe & Gallery 温々	1993				◎							◎	◎		
38 あっふるはうす	1979				○							◎			

各スペースの活動・事業内容として、制作や展示などの（アート系事業）だけではなくイベント・レンタルスペース、飲食、学習・講座、物販など（文化、商業、収益事業）を積極展開していることがわかる（表2）。また、図書、学習機能をはじめ地域のサロンの機能を加えることで、人の滞在、コミュニケーションを促す取り組みも目立つ。



また、（賃貸ではない）所有する物件を利活用している拠点は比較的艺术系事業に特化した傾向にあり、ほぼ100%アート系事業に専念（表3・ケース①）、アート系事業+地域コミュニティ・サービスや飲食事業を組み合わせる（表3・ケース②）傾向があり、物件賃料がかかる拠点で目立つのがレンタルスペース事業や、ある特定の文化コミュニティ（本、子育て、飲食）事業を主軸としつつイベント形式もしくは主軸の事業・活動と関連づける形でアート・表現発表の場を設けているスタイルであることが興味深い（表3・ケース③）。これら①②③のケースは立地環境に関わらずそれぞれ各地域に分布している。

### 3.3 立地環境及び建物形態

立地環境に関しては、①住宅地にひっそりとあるタイプ、②主要通りにむけて開いている路面店タイプ、③農地内、農地隣接型の事例など多様な分類が見られる。建物タイプに関しても、戸建庭付き、路面店、集合住宅の1階部分、2階部分、商業ビルの最上階等の多様なケースがあり、どのような建物スタイルも拠点として利用可、それぞれ個性的な環境で運営していると言える。

	拠点名	オープン	転用前用途	主用途	立地	建物
1	TORoto キッチン&コワーキングスペース	2024		シェアスペース		
<b>さいたま国際芸術祭2023</b>						
2	GAFU-gallery & space-	2023	工場	シェアスペース	住宅街	独立建物
3	ハムハウスー夢中飛行	2022	図書館	書店（棚貸）	商店街	集合住宅2F
4	カフェ&ギャラリー 空想庭園	2021		カフェ&ギャラリー	住宅街	独立建物
5	Cha Tora & Co Tora	2021	化粧品店	シェアキッチン、スタジオ	商店街	独立建物
6	Nook & Park	2021	社員寮	カフェ&シェアスペース	裏路地	独立建物
<b>さいたま国際芸術祭2020</b>						
7	CHICACU BookStore（移転）→本と!	2020				集合住宅1F
8	コンドウハウスKonキッチン	2020	民家	カフェ、子ども食堂	住宅街	独立建物
9	Space 845	2020	事務所	AIR	住宅街ー農地	独立建物
10	STUDIO・4 5	2020	写真スタジオ	写真スタジオ、イベント	住宅街	集合住宅1F
11	takase	2020				独立建物
12	マーブルテラス	2020			住宅街	1F
13	STAND Coffee コトコト& Gallery	2019	2世帯住宅	カフェ&ギャラリー		住宅併設
14	つきのみちくさ	2018			住宅街	住宅併設
15	カフェブルーバード	2018			住宅街	独立建物
16	クラフト&ギャラリー風画	2018以前				
17	靴下と生活雑貨のお店 さきっちゅ	2017			住宅街	独立建物
18	ONVO SALON urawa	2017			商業エリア	商業ビル5F
19	ブロックはかせ LABO	2017				
<b>さいたまトリエンナーレ2016</b>						
20	しばふハウス（拠点移転）	2016				
21	ファーム・インさぎ山	1997/2016	農地	農地、イベントスペース	農地	農地
22	ギャラリー&カフェソラII	2016				
23	ギャラリー樟楠 (kusu kusu)	2015	古民家	ギャラリー、ショップ	商業エリア	独立建物
24	Gallery Pepin	2015			住宅街	
25	路地裏GarageMarket	2014	工場	シェアスペース、マルシェ	住宅街	独立建物+集住
26	師岡制作所	2012	印刷工場	シェアアトリエ	住宅街	独立建物
27	モッキンカン木の森美術館	2012				
<b>さいたま市文化芸術都市条例</b>						
28	ヘルシーカフェのら	2009				

展示・イベントを主目的としたスペースには、元・事務所、工場など大規模建物を改修、大きなスペースを利用したものが多く見られる一方、規模の小さい拠点は他機能との連携、頻繁にイベントを開催・積極イベント展開をしているスペースも多い。

### 3.4 スペースの変容有無（当初の想いとその後の展開）

設立から時間を経てある特定活動・事業への特化もしくは事業内容変更・変容を確認できるスペースもあるが全体的に大きな変化はみられない。主宰者の設立当初の想いを元に人やイベントが集まり、スペース関連のコミュニティ・ネットワークが生まれ、地域の文化芸術拠点としての役割が着実に展開されている印象がある。

次章からは、選定した2拠点についての個別調査研究を進め、スペース設立に至る経緯と想いなども含め考察を深めていきたい。スペース主宰者たちがどのようにしてその場所を構えることになったのか～家、家族、人生のこと、仕事のことアートのこと、まちのことなど、スペース成立と主宰者の想いにまつわる多くのことを伺った。

## 第4章 調査研究事例

### 4.1 調査研究事例. 01- Space845

[ 運営者 ] 1名 (利根川兼一さん)

[ 転用前用途 ] 事務所 (設計事務所)

アーティスト・イン・レジデンス事業 (以下、AIR) 事業をはじめ、制作、展示、イベントのためのスペース。主宰の利根川さんとアーティスト企画によるイベントがスペースの内外で定期的  
に開催されている。



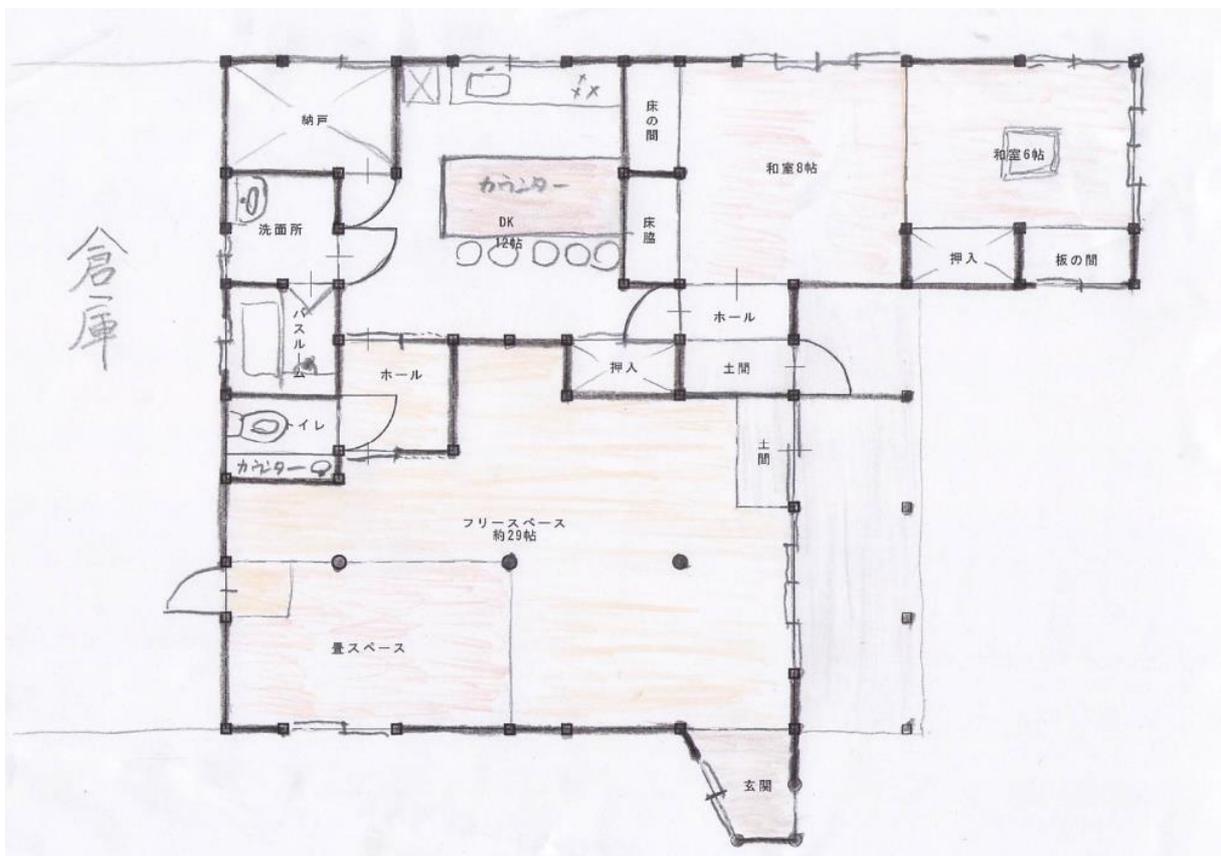
<sup>2</sup> 引用元 : Space 845 <https://www.tumblr.com/space845>

<sup>3</sup> 引用元 : Google 社「Google マップ、Google Earth」<https://www.google.co.jp/maps>

#### 4.1.1 Space845 その成り立ち、建物の転用プロセス

##### 建物概要

- ・ 構造：木造1階建て
- ・ 空き家利活用
  - ・ 利根川さんからは、どのようにしてこの場所を構えることになったのかスペース設立に至る経緯と想いを伺った。40代～家業のこと、そして2020年、空き家だった作業場をどうにかしようとDIYをキーワードに“人が寄ることから「何か」を生み出していける場所“の運営をはじめた。（Hasikko-lab 工作室）、さいたま国際芸術祭を通して得た経験とネットワークを元にアーティストスペース化していく。2023年からアーティスト・イン・レジデンスとしても運営。



4

<sup>4</sup> 間取り図：利根川兼一さん提供

## 4.1.2. Space845 の展開と文化芸術活動ネットワーク

略歴 2021年 OPEN 2023年～AIR事業開始

### Space 845 年表

- 2021年 「BODY PRINT ACTION 2021-気配を繋ぐ」展・浅見俊哉
- 2022年2月 「未来美展-冒険」- 遠藤一郎 一般非公開
- 2022年8月 「845 極めて私小説的展 vol.1」
- 2022年12月 「村井啓哲ライブ」場所はスタジオ45と ChaTora (スタジオ45主催の小泉文さんたちとの共催)
- 2022年 「BODY PRINT ACTION」後期展示
- 2023年 「未来美展6 -昇天-」 2023 (SACP アーツセンタープロジェクト・企画展)
- 2023年5月～8月 細倉一乃滞在制作発表
- 2023.12.01-12.20 阿目虎南 SAITAMA AIR Project in Iwatsuki
- 2023.12.01-12.20 コン・シデン SAITAMA AIR Project in Iwatsuki
- 2024年2月 ストミック+2.5 Architects 滞在制作発表 (アーツカウンシル事業)
- 2024年3月 to R mansion 滞在制作発表 (アーツカウンシル事業)
- 2024年6月 「北本ビタミンB」 (制作: 屋宜初音) 上映会
- 2025年2月～3月 「小林企画」、「荒悠平たち」滞在制作発表 (アーツカウンシル事業)

2021年のスペースの成り立ちと共に、さいたま国際芸術祭の関連活動からの展開としての「BODY PRINT ACTION 2021-気配を繋ぐ」展 -浅見俊哉 (2021) があり、そこから「未来美展-冒険」 遠藤一郎 (2022、一般非公開)、「細倉一乃滞在制作」 (2023) とつながっていき、この流れが2023年からのアーティスト・イン・レジデンス事業—その後のさいたま国際芸術祭2023のアーティスト滞在制作発表及び「北本ビタミンB」上映会、2025年「小林企画」、「荒悠平たち」滞在制作発表などへ展開していく。※ アーティスト・ひと・プロジェクトが媒介となりスペースの展開とネットワーク相関が時系列で浮かび上がってくることが見て取れる。

また岩槻・まちづくり関連及びさいたま国際芸術祭サポーターネットワークから展開される”さいたま路上観察学会”や”村井啓哲ライブ (2022)” @Cha Tora (岩槻家守舎)、アーティストの浅見俊哉さんやSACP 地域ネットワークからの展開としての進修館プロジェクト<sup>5</sup>。さいた

<sup>5</sup> 宮代町立コミュニティセンター進修館「へそたんけん」 <https://shinsyukan.or.jp/wp-content/uploads/2024/06/dayori202302.pdf>

ま国際芸術祭プロデューサーの芹沢高志さんとのラジオ・プロジェクト<sup>6</sup>への展開など、いくつかの方向での別の相関も読み取れるが、すべての相関において”さいたま国際芸術祭”との関連を見出すこともでき、”さいたま国際芸術祭”がスペースの活動や展開のキーファクターのひとつとなっていることが大変興味深い。

---

<sup>6</sup> 「〇〇さん、お話聴かせて！」 By おはなしラジオ  
<https://open.spotify.com/show/78jmUi480ARPjJdcna5NW5>

## 4.2 調査研究事例 02. - Cha Tora & Co Tora

[ 運営者 ] 岩槻家守舎（上村明日香さん、金子慎太郎さん、木津大輔さん）

[ 転用前用途 ] 商店（化粧品店）2021年 第1回リノベーションスクール@岩槻（2020）をきっかけにカフェ運営をはじめ→ 各種イベント、アート&クラフト委託販売、企画展など開催  
→ まちとの繋がり、街マルシェなどの活動が忙しくなり運営形態を変える。2023年よりシェアキッチン（1階）、シェアアトリエ（2階）として運営→ 現在、木曜日枠及び2階シェアアトリエ・スペースを利用し”まちのアートスペース”運営も進行中



外観の様子



1階室内の様子



1階（写真左）及び2階（写真右） 室内の様子

## 4.2.1 Cha Tora & Co Tora スペースの成り立ち、建物の転用プロセス

### 建物概要

- ・構造：木造（鉄骨梁）2階建て
- ・面積：約 40 m<sup>2</sup>（1階）、約 40 m<sup>2</sup>（2階）

2020年 第1回リノベーションスクール@岩槻 をきっかけに企画

2021年 カフェ+シェア・オフィス運営をはじめめる・開店記念写真展「とらやの記憶」

2023年 シェアキッチン+シェア・スタジオとして営業

Café Cha Tora（1階） + シェア・スタジオ Co Tora（2階）

2024年 木曜テナント枠を利用したアートスペース運営、イベントや企画展などを開催



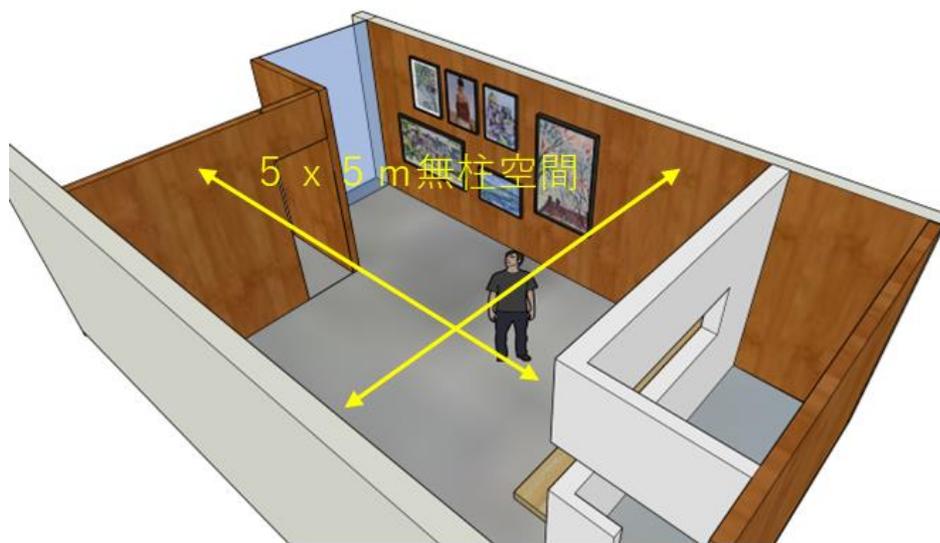
<sup>7</sup> 引用元：ギンザビビ岩槻店・株式会社とらや <https://ginzaviviiwatsuki.hp.peraichi.com/>

<sup>8</sup> 引用元：岩槻家守舎 (ChaTora & Co. Tora) <https://www.facebook.com/iwatsuki.yamorisya/photos>

## ChaTora 1F 店内及び展示スペース（3Dモデル）

天井高 2.95m、5 x 5 m無柱空間、商店街に面してショーウィンドウ

床：土間仕上げ、壁：木パネル（両サイドの壁面にピクチャーレール有、展示対応可）

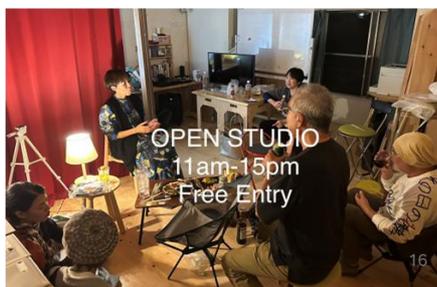


<sup>9</sup> 3D モデル及び写真は著者による

## 4.2.2 Cha Tora の展開と文化芸術活動ネットワーク

1階部分はシェアキッチンへ、2階部分はシェア・スタジオスペースへ

現状、1階はシェアキッチン、2Fはアーティスト利用を想定したシェア・スタジオスペースとして展開。商店街にある立地やコミュニティを活かした様々な活動が展開中（リノベーションスクール / リノベ塾@岩槻、部活商店、いわつき小商の学校、We're、栄町通り商店街、駅前商業ビル WATS とのマルシェ企画等地域との連携も顕著。1階部分は各曜日毎の多彩なテナント運営、カフェ、イベント+アート企画展<sup>10</sup>、リノベスクール、部活商店などとの協働・展開）。



<sup>10</sup> 2025年2月現在、著者による研究+実践の一貫として1Fと2Fでまちのアートスペースも運営中

<sup>11</sup> 引用元：岩槻家守舎 (ChaTora & Co.Tora) <https://www.facebook.com/iwatsuki.yamorisyua/photos>



岩槻家守舎が Chatora 運営と併せて行っているマルシェ・イベント事業及び ChaTora 界限で活動しているアーティスト、作家、利用者の多数が、さいたま市内の他のアート系スペース（路地裏ガレージマーケット、ONVO SALON やハムハウスー夢中飛行など）でも活動をしていることを鑑みると、ChaTora 界限の”ひと”を通して市内の他のアート系スペース及び界限のアーティスト・ネットワーキング、アート・コミュニティが形成されつつあることは大変興味深い。

また、前述の Space845 と同様に、Cha Tora の成り立ち及び展開やネットワークにも、さいたま国際芸術祭や芸術祭サポーターネットワーク<sup>12</sup>が多数垣間見られ、ここにも地域まちづくりと、さいたまアート・コミュニティ相互のネットワーク・関連性が見出せることは大変興味深い。

---

<sup>12</sup> ChaTora を運営している岩槻家守舎・上村明日香さん及び ChaTora のシャッターデザインをされた直井薫子さん（CHICACU Design Office & Bookstore 代表、”本と喫茶・夢中飛行”、”本と渚・夢中漂流” 主宰）はともに、さいたま国際芸術祭 2016 サポーター。店内ライブやイベントを企画した利根川兼一さん、ZANGAI 展（2024）の企画及び参加アーティスト・堤直人さん、鈴木知佐子さん、”みんなのさいたまアーツ資料館”を監修している矢ヶ崎健二さんなども国際芸術祭サポーターとして活動中。

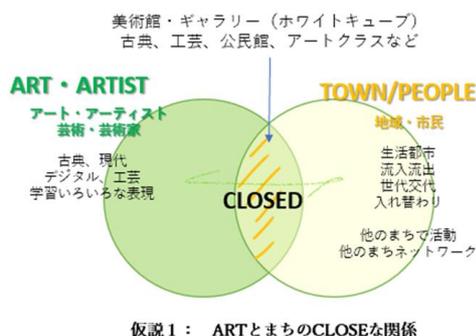
## 第5章 まとめ、そして展望

各拠点とも、文化芸術活動、地域活動と連携した様々なプログラムを複合して行うことで、地域とアーティストを含めた多様なネットワークを形成し、カフェ、ギャラリー、貸しスペースなどの単一機能を越えた個性的な文化芸術活動の拠点として認識されているといえる。

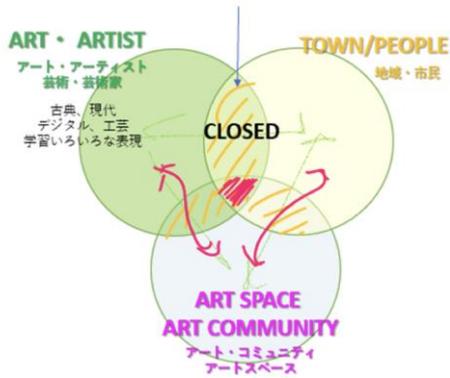
3度の芸術祭を契機に拠点の成立が増える傾向にあり、各拠点においても文化芸術活動・アートを紹介した新事業など新たな展開が起こっていく様子も興味深い。併せて、各スペース主宰者やスペース界限の”ひと”と、さいたま国際芸術祭との関係も興味深い。

先行した2件の調査研究事例では特に、スペースの成立、建物の転用プロセス、その後の展開、関連コミュニティ相関について調査研究をした。いずれの事例でも関連アーティスト、関連コミュニティ、つまり”ひと”から広がったネットワークを介して、別のイベントや交流が次々に展開、スペースが持続していく様もみてとれる。各スペースの展開の中には、さいたま国際芸術祭およびその関連・周辺のアート・コミュニティが常に存在し、それら”さいたま国際芸術祭コミュニティ＝”ひと”が拠点の展開におけるキーファクターの一つになっていることが読み取れる。

また、今回研究対象とした2012年以降に限った話ではあるが、さいたまアートの現状として、従来型のさいたまアートとまちのCLOSEな状態（フェーズ①）から、アートとまちとの関係がOPENになっていく状態（フェーズ②）に移行しつつある時期なのではないか？そしてその移行のプロセスにおいて、さいたま芸術祭およびその関連・周辺のアート・コミュニティ・ひとがアートとまちをつなぐ重要な媒介になっているのはないか？という新たな問いも生まれた。



**フェーズ①：** アートスペース・アーティストとまちのコミュニティがもっているネットワークや資源が積極的に関係しあっていないアートとまちのCLOSEな関係。人口135万人、交通アクセスがよく生活の利便性も高い、高い専門性をもった人材（アーティストも含む）が多く住んでいるまち。そのアート関連人材は東京を始めとした“さいたま以外”のまちで主な活動をしていたり”さいたま以外”でネットワークを展開したりしている状態



フェーズ②： 三度の芸術祭を経て育まれたアート・コミュニティ（まちのアートスペース、市民サポーターなど）やイベント等を介することで アーティストと地域・市民それぞれがもっているネットワークのより積極的な交流が起こっている状態。「まちのアート・コミュニティ（人）」や「まちのアート系スペース」を媒体として、従来型のアートとまちのCLOSEDな関係がOPENになっていく状態。

今後さらに事例調査をすすめるとともに、それぞれの拠点の主宰者が自らの活動をどのように評価しているのか、併せて地域の方々へのヒアリングなども行い、まちのアート系スペースや文化芸術拠点がどのような役割を担い、アーティストや地域からはどのように評価されているのか、そして、そこにアート・コミュニティがどのように関わっているのか、更に調査研究をすすめていきたい。

## 第6章 あとがき（Living Room ～ 実践編）

今回の調査研究を進めていく過程において、著者自身が実際にアート系スペースを設立・運営してみたらどうだろうかと思いつき、2024年7月から「まちのアートスペース | Living Room」という実験的なスペース運営を試みている。第4章で個別調査対象にもなっている岩槻区のCHATORA&COTORA、その1階と2階のスペースを借りて実際にスペースの設立と運営を経験してみたことで、この調査研究のまとめに至る色々な情報やネットワーク、実践に基づいた視点と多くの示唆を得る大変貴重な経験にもなった。

この経験と調査・研究が、第1章・研究目的でも述べた今後さいたま市で”まちのアート系スペース”を実践する（アート系スペースを始めるためのスターターキットを作る！）際の参考、そして一助になることを期待し今後さらなる事例調査を進めていきたいと思う。

最後に、この研究にあたっていろいろなご意見やアドバイス、インタビューや調査にご協力頂いたすべての皆さま、そしてLiving Roomの活動に関わり応援頂いていた皆さまに感謝いたします。



<sup>13</sup> 2024年9月 ZANGAI 展（企画展）開幕 写真：浅見俊哉

## まちのアートスペース | Living Room 活動の記録

### 経緯、その設立と展開

---

2024年1月 アートスペース研究のためのヒアリング調査

岩槻家守社（上村明日香さん、金子慎太郎さん）へのインタビュー

2024年6月 環境音楽レコード&古本カフェ・バー開業構想

Cha Tora - 岩槻家守舎（上村明日香さん）に相談

---

2024年7月 Living Room ソフト・オープン（1階）レコード屋、古本屋、カフェ

→ お勧め本の持ち込み、寒竹さんの編み物クラブ、Roseさんのタロットの会など  
まちの表現が集まり始め、多彩なコミュニティスペース化

2024年8月 Living Room @北本団地マーケット(出張営業)、団地アンビエント+ディスコ

芸術祭サポーターミーティング後のおしゃべりが展開、企画展の構想（堤直人さん）  
及び、師岡製作所開催イベント後の帰路で話をしていたメンバーが集まりとりあえず  
始めてみよう方式で企画展の話が進む

---

2024年9月 ZANGAI 展（企画展）開幕。週替わりの展示と設営、参加型の企画展として、出展  
4作家で始める。→最終的には、まちの作家さんなど14組の出展（10月）

---

2024年10月 CHATORA 2階のスペースも借りてアートスタジオ始動

”みんなのさいたまアーツ資料館 by ヤガさん監修” 準備室 開始

（さいたま国際芸術祭関連資料をアーカイブするプロジェクト）

商店街イベントとも連携し2階部分をオープン・スタジオ、オープン・ギャラリー

CHATORA 1階と2階でアートの展示が展開。

10月の後半から11月まで毎週アートプロジェクト的イベント開催

他店舗さんとのコラボ企画をいくつか開催

---

2024年11月 ZANGAI 展終了に併せて、様々な展示・イベント企画が持ち込まれる。

2024年12月 『微睡 NIGHT～静かな音楽会』 商店街のキャンドルナイト・イベントと連動して

環境音楽+DJ ライブを開催

『おしゃべりナイト#1』 『おしゃべりナイト#2』

まちのひとによるトークショーをリレーしていく企画 ・12月に2回開催～  
新たなイベントのシリーズ化

- 
- 2025年1月 1階部分の営業契約を解除～Livingroomの新展開  
→ZANGAI展の頃より毎週利用頂いていた養蜂家・赤井さんにより木曜日営業枠  
及びLivingRoomとそのコンセプトなどが引き継がれる
- 2025年2月 『2つのキーワードから特撮を語る』うえぼんトーク LIVE  
『Apres』鈴木知佐子個展  
『趣味コン #1』部活商店との共同企画  
『マルガーシ』ドキュメンタリー映画上映会（園木豪流）+馬頭琴 LIVE!
- 2025年3月 『趣味コン #2 ～缶詰ナイト』部活商店との共同企画
- 2025年4月 『NEW TOWNSCAPE』 SEKIMATA TAKAHIRO 写真展（開催予定）
- 



14

---

<sup>14</sup> 『趣味コン #2 ～缶詰ナイト』部活商店との共同企画

## 参考文献等

- [1] 井上真央 「現代日本におけるオルタナティブ・スペースをめぐる諸問題」 2014
- [2] 櫻井駿介 「現代日本における小規模民間型アートスペース《micro art space》の流転：2000年以降設立の事例から、主宰者たちの眼差しを中心に」 2019
- [3] 横山美和・羽藤英二 「地域の風景を素材としたアーティストインレジデンスの実態分析」 2011
- [4] 杉田敦 「オルタナティブ・スペース アーティスト・ラン・スペース」 2005
- [5] 吉田 早希, 室田 昌子 「滞在型芸術活動による地域活性化の取り組みと芸術家の滞在促進に関する研究～横浜市中区黄金町周辺地区を対象として」 2014
- [6] 黒川佑人 「継続的な地域拠点型アートプロジェクトによる地域の変化に関する研究 - 初動期の地域住民参画に着目して -」 2010
- [7] 佐藤郁哉 「フィールドワーク増訂版」 (2006/2021)、「フィールドワークの技法」 (2002/2020) 新曜社
- [8] 『さいたま国際芸術祭 市民サポーター事業 “さいたま市内アート系資源調査”』